

C
A
S

News Letter

Center for Asian Studies, Kanagawa University

神奈川大学アジア研究センター

No.10 December, 2018



Contents

《講演会報告》	
「北京大学史学部・大学院で講義して」 永野 善子	1
《視察報告》	
「諫早干拓を視察して」 秋山 憲治	3
《研究会報告》	
共同研究「冷戦後のアメリカの東アジア戦略と同盟」 佐竹 知彦	5
《研究会報告》	
共同研究「植民地国家と近代性」 高城 玲	7
2018年度活動報告	8

講演会報告

北京大学史学部・大学院で講義して

永野 善子

2018年3月18日～24日に北京大学から招聘を受けて、同史学部と大学院史学研究科で「フィリピン歴史研究」をテーマに3回の講義を行った。講義題目は、第1回目が“Philippine historiography and colonial discourse”、第2回目が“Revisiting Renato Constantino as historian”、そして第3回目が“Understanding Philippine financial crisis after WWI in the wider setting of Southeast Asian history”であった。第1回目の講義は学部生を対象としたもので受講者は100名程度であり、第2回目と第3回目の講義は大学院生を対象とし、受講生は10～15名程度であった。今回の招聘にあたって

は、北京大学歴史学系の包茂紅教授に大変にお世話になった。包教授は環境史を専門し、とくに東南アジア研究のなかでフィリピンに関心を寄せてきた。過去数年の間、京都の総合地球環境学研究所や京都大学東南アジア地域研究研究所、そして東京大学東洋文化研究所の客員教授を歴任され、日本のアジア研究を高く評価する気鋭の研究者である。包教授によれば、同教授が担当する講座では、学部と大学院で英語の講義を行うために、毎年10人程度の研究者を海外から短期で招聘している。学内における通常の授業は中国語で行われているが、グローバル化の流れのなかで、学生が英語の授業に慣れるよう海外からの研究者の招聘を積極的に行っている、という。とくに、博士課程の大学院生で一定



所や京都大学東南アジア地域研究研究所、そして東京大学東洋文化研究所の客員教授を歴任され、日本のアジア研究を高く評価する気鋭の研究者である。包教授によれば、同教授が担当する講座では、学部と大学院で英語の講義を行うために、毎年10人程度の研究者を海外から短期で招聘している。学内における通常の授業は中国語で行われているが、グローバル化の流れのなかで、学生が英語の授業に慣れるよう海外からの研究者の招聘を積極的に行っている、という。とくに、博士課程の大学院生で一定

水準以上の英語の学力を備えた場合には、中国政府の奨学金によりアメリカなど英語圏への留学を積極的に推奨している。こうした研究教育環境は、この10年余の中国の急速な経済発展を背景として研究教育資金が潤沢となったことによるものであることはいうまでもない。

ところで、私が行った講義であるが、幸い好評であった。いずれの講義についても学生からいくつもの興味深い質問が寄せられ、1回の講義時間2時間のうち、20分程度を質疑応答にあてることができた。3回の講義のうち、私自身が長年手がけてきたフィリピン銀行史研究についての第3回目の講義は、大学院生がこれから博士論文のテーマを決定したり、あるいはすでに決定したテーマにしたがって資料調査を行うに当たって最も参考になったようだった。

包教授によれば、「フィリピン歴史研究」をテーマに海外から研究者を招聘したのは私がふたりめで、最初のお一人は著名なフィリピン人歴史家である、という。フィリピンやアメリカにはフィリピン人の歴史研究者がたくさんいるので、当初は、そうしたフィリピン人歴史家を招聘した方が、より詳しいフィリピン史を学生に教えることができるのではないかと私は考えた。しかし、3回の講義を進めながら、数人の大学院生とさまざまな話題で議論するなかで、なぜ日本人の私を招聘したのかがわかってきたように思う。

その理由とは、アメリカ人やフィリピン人であれば、母国語あるいは公用語が英語なので、20世紀のフィリピン史研究におもに必要な英語史料の収集や史料調査後の英語論文の執筆に言語的制約はほとんどないといってよい。しかし、日本人が20世紀のフィリピン史研究に取り組むには、まずは英語という言語的制約の壁を越え、さらにフィリピンのみならずアメリカでの史料調査を行う必要がある。そしてなにより、アメリカの東南アジア研究の主要大学の研究者や主要図書館・公文書の司書から協力を得ない限り、アメリカで有効な史料調査を行うことは

できない。したがって、そのためのネットワークを日本のフィリピン研究者たちがこれまでどのように築いてきたのかを知ることは、北京大学の大学院生がこれから海外で研究を行うことに大いに役立つと考えているのではなかろうか。

思えば、日本のアジア研究が潤沢な研究資金のもとで急速に展開したのは1980年代に入ってからのものであった。現在、私たちはそうした時代からの研究の蓄積のうえに立って、今日も研究を続けている。とすると、今後、北京大学史学部の研究者や大学院生と学術交流を行うとすれば、何が必要なのか、そしてどのような可能性があるのかと、ときどき考えをめぐらす昨今である。

(所員 人間科学部教授)